

パースによる黒板の比喻 (1898年ケンブリッジ講演より)

• 質的多様の発現・対立・統一

何も描かれていない黒板を、原初の曖昧な潜在性 [the original vague potentiality]、あるいは少なくともその限定性の何らかの初期段階であるもののダイアグラムとしてみよう。

[...] この黒板の上へ、私がチョークの線を引く。この [白い線が描き込まれたという] 非連続性が、それによってのみ原初の曖昧さが確定性へむけて一步を踏みだし得たであろう、あの粗暴な作用の一つ [one of those brute acts すなわち第二性] である。[...] 私が実際そこに描いたのは長円形の線 [oval line] である。なぜならこの白いチョークの印 [white chalk-mark] は [幅のない] 線 [line] ではなく、ユークリッドの意味での平面図形 [plane figure] であり、それは一つの [連続的な] 表面 [surface] なのである。[本当に] 存在する唯一の線は、黒い表面と白い表面とを分かち境界だけである。それゆえ、黒板の上に [厳密な意味で] 非連続性を生じさせることができるのは、黒板が分かたれてできた白と黒の二つの連続面のあいだの反作用 [reaction between two continuous surfaces] によってのみである。

[これに対して線の内部の] 白さは第一性であり、何か新しいものの現出 [springing up of something new] である [境界に接するときの白のように、黒とのコントラストを含意しているわけではない]。しかし、黒と白との境界 [boundary] は、黒でもなく、白でもなく、両方でもなく、どちらでもないものでもない。それは二つの色が組になっていること

[pairedness of the two] である [境界 boundary を任意の近傍が内点 interior point と外点 exterior point とを共に含む点の集合として定義することもできる]。この事態は、白にとっては黒の能動的な第二性 [active Secondness] であり、黒にとっては白の能動的な第二性である。

[少し後に出てくる追加説明をここへ] 白さや黒さ、つまり第一性は、その本質において連続性に関しては無関心 [indifferent] である。第一性は、難なく一般化に身を任せてしまう

[lends itself readily to generalization] が、それ自身においては一般的でない [not in itself general]。白さと黒さとの間の境界は、本質的に非連続あるいは反一般的 [antigeneral] である。それは執拗なまでに 〈これ・ここ [this here] 〉 である。原初の潜勢態は、本質的に連続的あるいは一般的である。

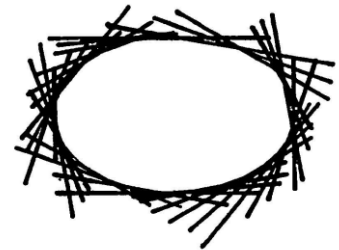
• 習慣化・一般化の傾向が加わる

しかしながら、かかる印は単なる偶然 [a mere accident] に過ぎず、したがって消去されてしまうこともできる。この印は、全く異なる仕方で描かれた別の印と干渉することはない [複数の線は相互に独立でありうる]。両者の間に整合性 [consistency] が成り立つ必要はない。この印が短時間であれ存続する [stay] のでない限り、つまり何らかの習慣の端緒 [some beginning of a habit] が確立されるまでは、それ以上の進歩は生じえず、後者の条件が満たされることにより、かの偶然的な出来事 [the accident] は、何らかの萌芽的・存続的な質を獲得し [acquires some incipient staying quality]、それが整合性への傾向ということになる。この

習慣は、一般化しようとする傾向であり、したがって一般化であり、それゆえ一般者〔a general〕であり、かくして連続体あるいは連続性である。それ〔獲得された習慣〕は、その起源を、潜在性に内在する原初的な連続性〔the original continuity which is inherent in potentiality〕にもっていないなければならない。一般性としてみられた連続性は、潜在性に内在しているが、それは本質的に一般的なのである。

- 個別事象よりも法則性が宇宙の際立った側面となる

描かれたあと線がひとたび少し持続すると、別の線をそのすぐ側に描くことができる。忽ち私たちの眼は、それらの線の覆いのようなひとつの新しい線〔a new line, the envelope of those others〕があることを、私たちに確信させる。このことは、一般化する傾向が偶然的な出来事から〔from chance occurrences〕新しい習慣を形成するという論理的な過程をかなりよく表している。私たちは、この過程を事物のなかに現に生じるものと想定することができる。新しい曲線は、その明瞭な性格においては新しいのであるが、その連続性は黒板そのものから得ている〔実際、曲線の方は完全に滑らかにはならない〕。原初的な潜在性は、そこから宇宙が形成されるアリストテレス的質料ないし不確定性〔Aristotelian matter or indeterminacy〕である。長円形への接線であろうとする習慣〔the habit of being tangent to the envelope〕のもとで増殖する直線は、徐々に自らの個性〔individuality〕を消失してゆく傾向を示す。



岩波文庫 265 ページの図 (ただし翻訳の底本の事情により、これは草稿 MS 948: 33 における図とは若干異なっている)。